

2023年5月21日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書2章13～23節

説教題：意味は変わる

2023年も3分の1が過ぎましたが、皆様の聖書通読のご様子は如何でしょうか。聖書は、「旧約」が929章、「新約」が260章、合計1189章あります。1189章を365日で割ると、1日3.3章を読むと1年で全部が終わる計算です。今からでも遅くありません。もし「今まで全然読んでいなかった」とおっしゃる方がおられても、今日からでも、「新旧約聖書」は厳しいとしても、「新約聖書」だけでも、通読に向けて頑張ってください。

なぜ、このようなことを申し上げるかという、私自身が「御言葉に養われていないな」と思われるからです。だから信仰生活がどこか薄っぺらい感じがします。と同時に、今日のメッセージの準備をしていて、御言葉の力に改めて目が開かれるような気がしたからです。ペテロは言いました。「あなたがたは…生まれたばかりの乳のみ子のように、純粋な、御言葉の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです」(1ペテロ2:1～2)。「御言葉によって成長するのだ」と言うのです。「天国に行ったら聖書は読めない」と聞いたことがあります。地上に生きている間に御言葉に養われ、私達を間違った道に導く悪に対抗して行きましょう。

### 1：内容～ヘロデが幼児を殺害する

今回は、「東方の博士達がイエスを拝みに来た」という箇所を学びました。今日の箇所はその続きです。ここで何が起きているのか。一言で言えば「ヘロデが幼子イエスを殺そうとしている」ということです。ヘロデは、この箇所等を読むと「狂気の王様」という印象がありますが、実際は、権謀術策渦巻く権力構造の中で賢く自分の力を拡大して行った、政治的な手腕を持っていた人だったようです。ローマ皇帝とも上手に関係を保ちました。また彼のやった大きな業績は「エルサレムの神殿を再建した—(増築した)」ということです。今でもエルサレムには、ヘロデが再建した神殿の壁の一部が残っていて、人々がそこで祈っています。ヘロデは、人々の神殿に対する願いをも実現したのです。しかしそのヘロデが、イエスを殺そうとしたのです。なぜでしょうか。

ヘロデは、純粋のユダヤ人ではなく、エドム人という民族の流れを持っていました。だからユダヤ人は、どこかでヘロデ王を認めていなかったのです。しかしヘロデは、「ユダ人の王」でいたかった。だから人々の尊敬を集めるために、神殿を再建したのです。そのようにして、必死で王様であらうとしました。それだけに、自分の立場を危うくするような者は赦さなかった。妻を殺し、伯父を殺し、息子を殺し、義理の父を殺し…皆が自分の王位を危うくすると思って殺して行きました。ヘロデは、そのように、権力がありながら疑心暗鬼の中で暮らさなければならなかった人です。

だから東方の博士達が「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおれますか」(マタイ2:2)と聞いて来た時、彼はその「ユダヤ人の王として生まれた子」を「殺してしまわなければならない」と考えました。彼はイエスを狙います。イエス1人を殺すためにベツレヘム周辺の2歳以下の男の子を全部殺してしまうという恐ろしいことまでするのです。

イエス様は守られます。ヨセフが夢で「エジプトに逃げるように」と告げられて、ヨセフがすぐにそのお告げに従ったために、一家は無事にエジプトに逃げる事が出来ました。しかし、他の子供達は殺されてしまうのです。子供達の母親は、悲しんだことでしょう、泣き叫んだことでしょう。

この出来事は、それが実際に起こった出来事だからマタイは書いたのですが、マタイにはこれを書く時に伝えたいことがあったと思うのです。ルターは言っています。「悪魔が、その悪魔に支配されているこの世が、幼子イエスと、その幼子イエスがもたらそうとして下さっている御国に対して、どんなに敵意を持っていたかということが、ここでこそ、明らかになった…この話は、どんなに一生懸命にイエスを滅ぼそうとしたかということを教えてくれる話だ」。それは逆に「イエス様がどんなに恐ろしい世界に赤子として生まれて下さったのか、神様はどんな恐ろしい世界にイエス様を送って下さったのか」、そのことを私達に教えます。私達を愛するために、十字架の贖いを成し遂げるために、神が払われた犠牲が、その最

初からどれほど大きなものであったのか、私達の胸に迫って来るわけです。

しかしマタイは、それだけを伝えようとしているのではないと思います。この事件は「人間の罪がどれほど恐ろしいことを引き起こすか」、そのことを証しします。しかし、ここを読む者は「なぜ、このことが起こることを、神は赦されたのか」という疑問を持つのではないのでしょうか。マタイは、それに何か答えようとしているのではないかと思います。

この個所には注目すべき言葉が繰り返されています。15 節「これは、主が預言者を通して、『わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した』と言われた事が成就するためであった」、17 節「そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した」、23 節「これは預言者たちを通して『この方はナザレ人と呼ばれる』と言われた事が成就するためであった」。この3つの言葉は「これで『旧約』の言葉が成就した」と言うのです。この記事だけでなく、私達の人生には色々な不条理な苦しみ、悲しみがあります。それらが単に偶然に起こっているとすれば、私達は途方に暮れてしまうのです。しかしマタイは、この個所を通して「聖書に照らして考える時、神様を計算に入れる時、出来事の意味は変わってくるのだ」ということを教えてくれるように思うのです。繰り返される3つの言葉を通して、マタイの、聖書のメッセージを受け取りたいと思います。

## 2: メッセージ

### 1) 私達は神から呼び出して頂いた

1 番目は13~15 節です。東方の博士達が、別の道を通して自分達の国に帰ってしまった時に、ヘロデは激怒して、イエスを探し出して殺そうとしました。その時、ヨセフは、夢で主の使いのメッセージを受けて、イエスとマリヤを連れてエジプトに逃れます。恐らくエジプトのアレキサンドリアという町だっただろうと言われます。当時、ユダヤの国で為政者に睨まれた人が逃げ場所としていたのが、アレキサンドリアでした。いずれにしても聖家族は、ヘロデが死ぬまでそこに滞在します。ヘロデが紀元前4年に死ぬと、エジプトから呼び出されてイスラエルに帰って来るのです。

そのことにマタイは、「旧約」の預言者ホセアの言葉を引用します。「ホセア書 11 章」:「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した」(ホセア 11:1)。これは第一義的には、ホセアの時代の700年ほど前に起こった「出エジプト」のことが語られているのですが、同時にホセアは—(自分では気づいていなかったかも知れませんが)—ホセアの時代の700年後のイエス様の出来事を預言していたのです。

しかし、イエス様に起こった出来事を書いているだけでもないのです。「聖書」では、「エジプト」は「悪」の代名詞として語られます。それはつまり、罪の中に生きていた私達が、神様によって呼び出されたことまでが語られているのだと思います。私達は、イエス様のご生涯、十字架、復活によって「神の子」とされ、「わたしの子」と呼んで頂いて、神に呼び出して頂いた者なのです。マタイは、この出来事を通してそのことまでを語っていると思います。皆様はいかがでしょう。私は自分の過去を思い出して、恥ずかしい思い、辛い思い、情けない思い、苦しい思い、色々な思いに苛まれます。泥の中を這いずり回っているような時もありました。そのような者を、神は「私の子」と呼んで、選び出して下さったのです。何という恵みだろうかと思えます。それも、イエス様のご生涯、十字架、復活に懸かっていたことを思う時、本当にイエス様に感謝することです。

### 2) 神には深いみ旨がある

第2番目は16~18 節です。ヘロデによってベツレヘムとその近辺の2歳以下の男の子は殺されました。その数20~30人ほどでしょうか。「ヘロデの残虐さからすると驚くほどのことでもなかっただろう」という学者もいます。しかし子供を殺された親(母親)は、どんなに辛かったでしょうか。

マタイはここで、「エレミヤ書 31 章」の言葉を引用しています。「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちのことで泣き、慰めてもらおうともしない、子供たちがもういないからだ」(18)。ラケルというのは、「創世記」に登場するアブラハムの孫のヤコブの妻ラケルのことです。ラケル

はヨセフの母でした。ヨセフは、兄達の恨みを買って、兄達の手でエジプトに売り飛ばされます。でも兄達は、父ヤコブに「ヨセフは野獣に噛み殺されてしまったに違いない」と嘘の報告をします。真実を知らないヤコブは、慰められることも拒んで嘆きました。母親のラケルも、子供を失った母の悲しみを一身に背負って嘆いたはずです。エレミヤの預言は、本来はそのラケルの悲しみと—{ラケルは死んだ後、ベツレヘム—(ここではラマと呼ばれている)—に葬られましたから—それから1400年程後、やがてユダ王国がバビロンに滅ぼされて、ユダの主だった人々がラケルの墓の傍らを通ってバビロンへ引かれて行くことになる、「その姿を、ユダヤ民族の母であるラケルも嘆いているだろう」という2つの悲しみを重ね合わせて歌ったものです。

しかしマタイは、「エレミヤは、さらに『イエスが誕生された』この時の事件をも見せられて、その悲しみを歌っていたのだ」ということを聖霊によって示されて、ここに引用したのです。しかし、マタイがこの御言葉を引用したのは、この御言葉がそのような悲しみを歌うだけに終わらないからです。エレミヤの言葉は、ユダヤ人がバビロンに引かれて行く、そのことを語りながら、すぐ後にこう続くのです。「主はこう仰せられる。『あなたの泣く声をとどめ、目の涙をとどめよ。あなたの労苦には報いがあるからだ…彼らは敵の国から帰って来る。あなたの将来には望みがある…あなたの子らは自分の国に帰って来る…』…」(エレミヤ31:16~17)。回復の預言です。希望の宣言です。現実には、悲惨な出来事です。しかし、ここには嘆き悲しむ母親達が、涙を拭われ、泣き止むことが、約束されているのです。それはつまり、イエスという方は、そのように、嘆きを喜びに変えて下さる救い主としてお出でになったということ、マタイはここで語ろうとしているのではないかと思います。

宗教改革者ルターは言いました。「殺された幼子たちこそキリストのための最初の殉教者たちであった」(ルター)。「聖書」には「主の聖徒たちの死は主の目に尊い」(詩篇116:5)とあります。であればマタイは、「この幼子達はイエスの十字架の贖いによって救われ、天国に入って行ったのだ」ということを言おうとされていると思います。ボンヘッファーという神学者—(後にナチスによって処刑された神学者)—はこう言っています。「ベツレヘムにおいて殺された幼ない子達は、気の毒であったと、我々は言うかも知れないが、違う…この子供達は…イエスのために死んだのだ…イエスはいつも、この子供達から離れないのだ…この子供達は、イエスと共に今尚生きているのだ」(ボンヘッファー)。私は「天国は本当にある」という映画を思い出しました。1人の少年が大病をして、手術の途中、その魂が天国に導かれます。そしてそこで、自分が生まれる前にお母さんが流産したお姉さんに出会うのです。お姉さんは、イエス様の御許で祝福に満たされて生きていたのです。やがて天国でお母さんにも会うでしょう。少年は、天国にずっと居たかったけれど、イエス様から「お父さん、お母さんが、君の快復を祈っているから、地上に帰りなさい」と言われ、その魂が地上に帰って来るのです。つまり手術が成功して、彼は快復するのです。

私達には、理解出来ないことがあります。しかし神は、永遠の観点から、私達に分からないことも、やがて私達が「そうだったのか」と納得出来るような形で、その偉大なご計画を分からせて下さるのではないのでしょうか。

### 3：主イエスは私達がどんな状況にあっても共におられる

3番目は19~23節です。ヘロデ王が死んだ後、ヨセフは御告げを受けて、マリヤとイエス様を連れてイスラエルに帰って来ます。しかしベツレヘムのあるユダヤ地方は、ヘロデの息子のアケラオという暴君が治めていたので、夢で告げられた通り、故郷ガリラヤのナザレに帰るのです。イエス様はナザレで成長されます。そしてその伝道生涯の間、人々から「ナザレのイエス」と呼ばれることになるのです。

実は「この方はナザレ人と呼ばれる」(23)という言葉は、「旧約」にはありません。マタイがどんな資料を使ったのか、学者の間でも議論があります。ただ1つ、言えることがあります。「ヨハネ1章」でイエス様の弟子になったナタナエルが弟子になる前、ピリポからイエスのことを聞いた時、こう言います。「ナザレから何の良いものが出るだろう」(ヨハネ1:46)。そのように、ナザレという村は、「つまらない村」だと思われていたのではないのでしょうか。「ナザレ人と呼ばれる」ということは、そのこと自体が人々から軽蔑されることを意味したのではないのでしょうか。「旧約」の預言者イザヤは、イエス様について預

言して言いました。「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった」(イザヤ 53:3)。そのように、イエス様は、言わば最も低いところから、やがて復活、昇天と、最も高い所に上られた方です。つまり、低きから高きまで、全てを知り、御手の中に治めておられる方なのです。私達の生きるところ、どんなところにも、イエス様のおられない所はないのです。

「この方はナザレ人と呼ばれる」(23)とマタイが書いた時、それはイエス様の辱められることの多いご生涯、人々から捨てられるようなご生涯、弱さを知っておられたご生涯、そのようなご生涯を生きられたことを強調しているのではないのでしょうか。それは、私達に何を語るのか。

教会は、信仰者は、地の塩として、世の中の弱い立場にある人々、苦しんでいる人々、そういう人々に対する温かい視点をなくしてはならないということではないのでしょうか。もちろん、何が出来るというわけではありません。特に私達のような小さな教会は、具体的に出来ることはないかも知れません。しかし、世の中の隅に追いやられている人々、弱さを嘆いている人々、苦しみの中を生きている人々、人からバカにされたり、軽蔑されたりしている人々、そういう人々に対するイエス様の視点、そのようなものはなくさないようにしたいと願うのです。

森永製菓の創業者である森永太郎はクリスチャンです。彼は、一攫千金を夢見てアメリカに渡りますが、商売が上手く行かず、ある老夫婦の家の下働きをしなければならなくなりました。その頃は、今より人種差別の激しかった頃です。東洋人は、白人からの差別の対象でした。しかし太郎を雇ってくれた老夫婦は、太郎に差別的な態度を取らなかったのです。太郎は聞いたのです。「どうしてですか」。老夫婦は言いました。私達も神に造られました。あなたも神に造られた存在です。神に造られた者が、同じように神に造られた人を差別することは出来ません。この夫婦に導かれて、彼はクリスチャンになるのです。彼の信仰の生涯には紆余曲折がありましたが、晩年「我は罪人の頭なり」と題して、全国の教会で証しをして周ったのです、信仰の生涯を全うしたのです。

カナダの教会で奉仕をしている時、カウンセラーの兄弟が証しをしてくれたことがあります。「右に沢山の幸いな人が集まっている大教会があるとします。左に貧しい人が数人集まっている所があるとします。イエス様ならどちらに行かれるでしょうか」。これも「教会はイエス様の視点をなくしてはいけないのではないか」というメッセージでした。

以上、3つの言葉を基にこの個所を見て来ました。先日「デイリーブレッド」で「わたしが彼らに語っている幸福もみな、わたしが彼らにもたらす」(エレミヤ 32:41)という言葉に触れて、新たな希望をもらった気がしました。私達が聖書に親しんで神を計算に入れる時、私達に起こる様々な不条理に見える出来事の中を、私達はなお意味と希望を持って通って行けるのではないのでしょうか。御言葉と共に生きて行きたいと願うことです。